

石森延男

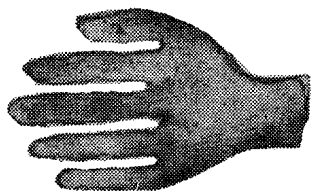
童話のつくり方

いとし子にお話を



童話のつくり方

いとし子にお話を



あすなろ書房

童話のつくり方



1976年7月30日

発行

著者 石 森 延 男

発行者 山 浦 常 克

印刷者 白 田 泰 雄

発行所 株式 会社 あすなる書房

東京都新宿区弁天町107石嶋ビル
電話(203)3350/振替東京9-63084

佐久印刷・ナショナル製本

0337-50060-0060

著 者 紹 介

石森延男 (いしもり・のぶお)

1897年北海道札幌に生まれる。

東京高等師範学校卒業。中学校、師範学校教員をへて、現在、昭和女子大学教授。早くから童謡、童話の創作に志し、1957年「コタンの口笛」で第一回未明文賞。1963年「パンのみやげ話」で第一回野間児童文芸賞受賞。

著書——「コタンの口笛」「桐の花」「黄色な風船」(あすなる書房刊)ほか。

落丁・乱丁本はおとりかえいたします。

はしがき

いとし子の食事は、母親あなたがじぶんで作るように、いとし子に与えるお話は、あなたじしんの手で――

というのが、わたしのモットーだ。

なぜか、いとし子のからだのことや、すぎきらいのことなど、あなたは、だれよりいちばんよく知っているからだ。つまりよくあった食事が作れるからだ。そうして作った食事は喜ばれ、おのずから滋養にもなるう。

いとし子の心で、のぼしたいものはなにか、ためたいものはなにかなど――よく知っているのも、やはりあなた母親だ。

だから、心の糧といわれるお話も、あなたの手で――といたくなるではないか。どのくらいの分量を与えたら適当か、塩かげんは、甘さは、とり合わせはと――気をくばってこそ、そのお話は喜ばれる、それだけ心を肥やすことになる。

どこのうちの子どもも、さかんにお話をせがむものだ、おやつをせがむように。そこで母親はしかたなく、どこからか本をかりてきて読んでやる。読んでもたちまちおわってしまう。おわろうがおわるまいが、そんなことおかまいなしに、子どもはお話をまたせがむ。忍耐強い母親もさすがにこうなるさくなり、「しばらく中止だよ」を宣言。そんな宣言ぐらいいなんのその、いっこうに平気で子どもは根づよく攻めたてる。波状攻撃をやらかす。ついに万策つきるときがくる。そんなとき、あなたは、ためしに、お話の自作自演をやってみてはどうだろう。効果てきめん、いとし子は、にこにこ顔で「いちばん、おもしろいや」とくる。

本書は、教師や保母、女子大生、母親が、お話の自作自演をやってみようと思ったときに、すこしでも役にたてばと願って書いたもの、といっても「お話の作り方」などという手品師みたいな早業は、わたしには、できない。にもかかわらず「あすなろ書房」の山浦くんが、どうしても書けといってきかない。「母親たちにお話づくりの運動をおこすんだから」という。そうなるとなお筆はにぶる。「運動」なんてものは、たいしてききめないことを知っているからだ。たとえばお話づくりの運動をおこしても、おいそれと、行

なわれるとも考えられないからだ。またいつとき運動熱にうかされたとしても、すぐ消えるようだとかえって、そのあとが低くなりがちである。

だが、わたしは、「いとし子にお話を」という趣旨には賛成で、まあまあから関心をもっている。とくに今日のように映像文化に圧殺されそうになって、あっぱあっぱしている子どもたちに、酸素吸入でもふっかけてやり、息を支えてやるには、お話がよい。お話といっても、ただ外国生まれのものや、大昔のものや、怪獣ものなどより、子どもじんの日常生活に生きているものでお話をつくり、それを語ったら、どんなに喜び、かつ身につきまされるのではないかと思う。

そんな意味で、この本の名をはじめ『いとし子にお話を』にした。そうして中味は、ひたすらわたしがいままでひとり歩きをしてきた道程をそのまま、あらわに書きつけることにする。かくすことなく、手のうちを見せるかっこうだ。「なあんだ、これだけか」「貧弱じゃねえか」「ちっともわかんないや」こういうわれてもいたしかたない。申しわけないが、いまのところ、これがわたしのありったけのお話づくりの経験なのだ。

この貧しいひとつの経験をもとにして、あなたらしいお話づくりの道程をほかの人に聞かせてやってほしい。またお話づくりを経験した何人かで集まり、話しあいながらさらに

くふうをこらすこともよからう。そうしたら、それこそ山浦くんという「母親のお話づくり」の芽ぐらいになるかもしれない。

いとし子たちのためにお話を――、その日の来たらんことを望む。

目次

はしがき

はじめに 八

1 思い出をお話に 二五

木のめくきのめ 二九

のうのせんせい 四三

たなばたかざり 五三

クロ 六四

2 聞いたことをお話に 七九

べんおじさん 八一

アトリエの焼け跡 九五

たぬきのタロ 一〇五

テニスIIエピソード 一一〇

3 見たことをお話に……………一二〇

きいろな 水ぎ……………一二四

すいれんの花……………一二九

笑いのあることば……………一四〇

ホートン風景……………一四四

やりなおし……………一四九

校庭のかしの木……………一五一

綿菓子……………一五四

4 そばにあるものをお話に……………一六四

紅 茶……………一八〇

ろうか……………一八五

先生の手……………一八九

クレヨン……………一九一

夕やけ雲……………二〇四

5 連想をもとにしてお話を……………二一五

酸素と水素……………二二〇

ゼ　ロ……………二二八

6 想像をもとにしてお話を……………二三五

たんぽぽの　たび……………二三七

おしゃれ　トンボ……………二四二

竹の　ぶらんこ……………二六〇

竹の　ぶらんこ……………二六九

7 お話の筋について……………二七九

犬の足あと……………二八六

赤い木の実……………二九五

おわりに……………三二〇

はじめに

赤ちゃんが生まれると、まず名まえをつけるでしょう。気の早いおとうさんやおかあさんは、生まれる前からもう名をつけている。男の子なら「太郎」、女の子なら「花子」といったように。

それほど生まれてくる赤ちゃんを待っており、楽しんでおり、かわいがっているのだ。

出産届には、それぞれ赤ちゃんの将来に幸あれかしという意味をこめた名まえが書かれ、赤ちゃんのへやには、命名の札が飾られる。こうしてみんなから祝福されつつ、赤ちゃんの人生がはじまる。

生まれて三週間ぐらいいは、まだ赤ちゃんの目が見えないという。あんなきれいな、つぶらな目をしているのに見えないとはおかしい。だが光も色もうつらないという。

耳もまた聞こえないそう。柔らかなうす紅の耳たぶをして、なんでも聞こえそうなのに、さっぱり聞こえないという。こうお医者さんもうし、心理学者もいうから、まちがいはあるまい。

それなのに、赤ちゃんに名まえがつくと、おかあさんは、その名まえをさっそく呼ぶ。「太郎」

なら、「太郎や、太郎や」といつて呼びつづけるし、「花子」なら「花子や、花子や」と呼ばないで、は夜も日もあけない。

だが考えてみれば、いくらこのようにして「太郎」と呼び、「花子」と声かけても、当の赤ちゃんは、馬耳東風あらぬかたを、いい目でながめ、かわいい耳で音ならぬ音に聞きほれているといったあんばい。たとえ生理的に網膜にうつろうが、うつるまいが、心理学的に鼓膜にひびこるがひびかなかるうが、おかあさんのほうもおかまいなしで、赤ちゃんの顔を見ては、「太郎」を連呼し「花子」を反復する。

考えてみれば、おかあさんはむだなことを赤ちゃんに對してしかけているわけになる。役にもたない呼びかけを盛んにやっているのだが、そこが、おかあさんというもので、むだをむだと思わず、役にたたないとも考えず、何かにつかれでもしたように、「太郎や」「花子や」をくりかえす。

名まえを呼ぶだけではない、子もり歌をうたう、ながながと眠るまでうたい続け、きげんのいい赤ちゃんの顔をのぞいては、ついお話をしかける。全く労力の損失。エネルギーのロス。おかあさんにしてみれば、これが労力の損失などと思わぬばかりか、このむだごとをするのが、楽しくてならないのだからふしぎだ。そうしないではいられないからなおふしぎだ。

三週間という日数がたつて、赤ちゃんのひとみが、外界の光を色彩をほのぼのとした明るさとして

感じたときはどうであろうか。まったくの無音静寂のなかに、かそけきびきを聞きとったときのおどろきはどうか。思うだに、わたしは、喜びにみたされる。こんな人間夜明けのようすをだれか、かいてみないか、もしもこれがかけるとしたら、おそらくどこかに住むひとりの母親にちがいない。

せんだってふとテレビを見てみると、小学校に入学してきた一年生の群がうつった。帽子をかぶり、胸に名札をつけて。△ああ、その名札の名まえを、きみはよく覚えてるだろう。きみのおかさんが、きみの赤ちゃん時代から、朝な夕な呼んできた名まえだ▽一年生たちはやがて講堂にはいつて、校長からのあいさつを受けるところがうつる。よくわかりますといった顔つき、目つき、耳つきとはいわないが、しゃんとしている姿勢だ。それをうしろに立って母親たちが見守っている。喜びにあふれ、思いあまつてか、ハンカチを顔にあてるのもあった。△そうだろうとも、入学するまでの六カ年という月日は、ただごとではない。よくもこんなに育ってくれた。両親そろって、欠けることなく、ここまでともかくたどりつけた。そう思っただけで、胸がいっぱいになるおかあさんたち――▽テレビの一情景を見て、わたしはふと、わたしの入学のころを思わずにはいられなかった。小学校は、うちから四キロあまりもあったので、子どもの足ではいささか遠すぎる。近いところにも小学校はあったのだが、姉たちが師範学校の付属小学校に通っていたので、わたしもそこへ通うことになったらしい。近くの小学校では、入学前に試験みたいなものはないのに、遠い付属小学校には、これが

ある。二重に負担がかかるので。小さいわたしは、付属小学校へ行くことをいやがった。わたしはおそらく煮えきらない返事をしたり、ふくれつつらをして姉たちを困らせたにちがいない。ふたりの姉は、しきりに学校のおもしろいことを吹聴したり、通学のときは、いっしょになってやるといったり。学業行事の楽しさを語ったりする。そのうちに、とうとう試問の日になった。当日、上の姉につれられて出かける。長い道を歩きながら、わたしの住所や番地を覚えさせられ、両親と兄弟の名まえと年を覚えさせられる。百までの数がいえるようになんども唱えさせられる。こっちはほとほといやになり、くると回れ右して家に帰ろうと思ったが、姉が、わたしの手をぎっしり握っている、それもかなわない。

試問では、姉から覚えさせられたものなどひとつも出なかった。色紙を何枚もち出して、その色の名をいわせられた。わたしは、絵が好きで、そのころあった六色鉛筆で、でたらめな絵をかくて遊んでいたから、そんな試問はへいちゃらだった。それからへんてこりんのことを聞かれた。「綿一貫目と石一貫目と、どっちが重いと思うか」というのである。わたしは、「石」と答えた。綿をちぎって空中にふわふわ飛ばして遊んだが、石のかけらは、そんなまねはできない、石の重いのはあたりまえじゃないか。あとの試問は忘れてしまった。廊下へ出てくるなり姉がそばによってきて、一部始終聞きたです。「うるさいな、帰るよ」そう抵抗して、外に出る。

三月の下旬、北の国では、日かげにまだ雪が残っている。積もった雪におしつぶされた枯草は毛皮

みたいに地べたにくっついてゐる。つめたいような、なま暖かいような風が土のにおいを運んでくる。こんな春先の季節は、わたしのいちばんすきなものだ。

姉は、どての枯草に腰をおろした。えび茶のはかまをひろげ、ひざの上にふるしきをひらく。おにぎりをもってきたのだ。わたしも姉のそばによつてしりもちをついて、砂糖しゅうゆをつけて焼いたにぎりめしをほほばった。空は明るくて光っていたが、ヒバリはまだ鳴いてはいない。おさげにした姉の長い髪の毛が、白いリボンできりつと結ばれている。△モンシロチョウでもとまっているみたいだな▽そんな印象と、「試問なんか気にしなくてもいいよ」と、むぞうさにいったことが、心に残っている。付属小学校に入学するにはしたが、遠い道を通学するのがいやで、とうとうひざを痛めた。そのくせしだいにその学校が好きになつてしまふ。運動場は広くて、丘あり谷ありで、牧草が茂り、かくれんぼやるにはもってこいだ。雪しろの池でいかだ遊びもできる。学校のまわりにはえたカラマツは、その芽ぶきもきれいだし、秋のそのモミジ葉は、かがやかしい。友だちもよく、先生もよかった。六年を卒業するとき、クラスメートは、ほとんど中学校の受験を希望したが、わたしは、しなかった。同じ学校の高等科にはいることにした。ここを離れたくないほど好きになっていた。そこから本校つまり師範学校にウナギのぼりする。それが教師稼業を一生続けるきっかけになろうとは、よもしらなかった。ちょっとしたテレビを見ていても、こうして、わたしはわたしなりに思い出を心に浮かべながらながめているのだが、あなたもそういうことがあるだろう。

見ているテレビは、同じものでも、見ている人によってそれぞれ違ったことを自分の心に描きながら見たら感じたりするものだ。このことは、テレビだけに限ったことではない。庭に咲く花を見ても、空を流れる雲を見ても、よくあること。同じ文学を読んでもそのとおり。

話を前にもどして、赤ちゃんがことばを覚えるのには、どのようにするのだろうか。赤ちゃんが、ことばをだんだん覚えて、聞いてわかり、話ができるようになり、小学校に入学するころには、子どもたちは、ざっと三千のことばを身につけているということだ。この三千のことばはいちどに覚えたのではない。そのとき、その場に即してひとつひとつ、なんども使って覚えたものだ。この三千のことばは、生きていくためには土台になるといわれる。たいせつな基本語いとなるからだ。そうしてこの三千語は、一生かかって身につける基本語いの約三分の二にもあたるといふから、たいへんな数だ。小学校から中学校、高等学校、就職あるいは大学を出て、社会人となり、一生かかって残りの三分の一を身につけることになるからたいしたものだというのだ。

してみると、赤ちゃんが生まれて、小学校の門をくぐるまでに得たことばは、いかに貴重なものであるかがわれよう。三千語という数は、平均したものだから、進んだ子どもは、三千五百は覚えていられるうし、おくらしている子どもは、二千五百ぐらい。この数のひらきは、たやすく埋めることはできない。小学校にはいって、いろいろな学科を学ぶが、ことばの力あるなしは、学習の進み方に大きな差の生まれることは想像つくだろう。

あなたは、お子さんが、ものをいいはじめたころ、日記をつけたことがあるだろうか。きょう、こんなことばをいったとか、こんなことを、このようないいかたで話したとか——日記につけておくと、お子さんのことばの成長、つまり心の成長のあとがよくわかって楽しい。

例としてわたしの次女七重のことばを観察して少し書きとめたものがあるから参考になるかもしれない。

わたしは、二年三カ月の七重をつれて散歩に出ました。

家から十二、三分ばかり歩いたところに、広い草原があるので、そこへつれていこうと思ったのです。わたしたちの足では十二、三分のところですが、七重にはそうはいきませんでした。四十分もかかりました。これは足がおそいというためばかりでなく、道ばたにあるものを、なんでも見つけて、それに話しかけたり、そこで遊んだりしたからでした。

わたしはべつに急ぐこともありませんでしたから、七重の気のすむようにしてつれていきました。ためしに、わたしは七重のいったことばを紙切れに書きとめてみたのです。

クロイ ワンワンー キタナイ ワンワンチャンーアンヨ ナメテルワークツケルヨーフツテ
ーハイーイライナイノーオハナシシテーワンワンーミテルワ ウシローワンワンチャンーモットーイ
コウーアカチャン ネットルワーゴメンクダサイッテーハイッテクノヨーワンワンチャンーネットルワ